

La bato

la dua eldono
verkita de Lena Karpunina
eldonita de Impeto, 2006
158 paĝoj

Neokazinta amo

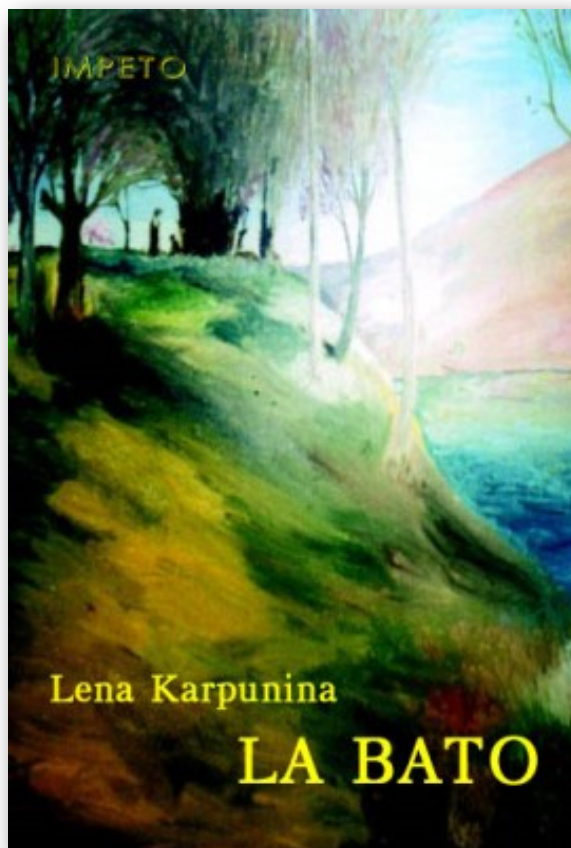
verkita de Lena Karpunina
eldonita de Flandra Esperanto-Ligo, 2007
149 paĝoj

Lena Karpuninaは、1963年にロシア南西部の都市カルーガで生まれたロシア人で、幼いころ両親とともに中央アジアのタジキスタンに移住し、首都ドゥシャンベで育った。1993年にドイツに移住し、夫でエスペランチストのGerd Bussingとともにベルリンに住んでいたが、2013年に50歳で他界し、あとに2冊の短編小説集が残された。

1冊目は、“La bato”である。

2000年にFlandra Esperanto-Ligoから刊行されたが、2006年には、さらに3編を増補してモスクワのImpetoから刊行された。私が読んだのは、この第2版である。われわれには馴染みのない中央アジアで成長してゆく少女を主人公にした作品など18編が収録されている。両親との葛藤を抱える少女や、善良であったりエキセントリックであったりする多彩な人物が登場するが、物語には本人の自伝的要素が色濃く投影されている。

2冊目の“Neokazinta amo”は、翌2007年にFELから刊行された。本書も短編小説集で、15編の短編が収録されている。とりわけ1940年代



のシベリアの強制収容所を舞台にした作品が6編収録されており、うち3編は“La bato”第2版で増補された作品と重複しているが、一層の彫琢のあとがうかがえる。

タジキスタンはソ連を構成する一共和国であったが、ソ連の崩壊に伴い1991年に独立した。その翌年には内戦が勃発し、1997年の終結までに5万人以上が犠牲になった。この間、ロシア人の出国が相次ぎ、全人口に占めるロシア人の割合は、1959年には13.3パーセント、ソ連の崩壊直前の1989年には7.6パーセントだったが、2010年には0.5パーセントにまで激減した。そうした状況下で、彼女は体制の崩壊と混乱、それに伴う危険を、身をもって体験したものと思われる。自身は

1993年にドイツに移住したが、内戦のさなかに発生した虐殺を扱った作品も書いている（“Mortpafitaj pomoj”が1冊目に、“La felico”が2冊目に収録されている）。また、彼女はタジキスタンとドイツという異なった文化世界に身を置いたが、どちらでもマイノリティに属していたのであろう。少女や囚人など弱者の目に映じた社会の不条理が描かれている作品が多い。

エスペラントを学んだのはソ連崩壊の直前の1988年である。創作のきっかけについて彼女は、1966年の世界エスペラント大会（プラハで開催）で、文芸コンクールに入賞した作品が朗読されるのを聞いて、自分も応募してみようと思ったから、と語っている。そこからしても、大部分はドイツで故郷のことや先行世代の苦難を思いつつ執筆されたのであろう。それ以後、彼女は文芸コンクールの常連となり、この2冊に収録された短編のいくつかは、その入賞作である。

以下では特にスターリン時代末期のシベリアの強制収容所を舞台とする一連の作品について書いてみたい。それらはおおむね一人称で語られているが、無論、1963年生まれの彼女に直接シベリア体験があるわけではない。が、父親を初め年長の世代には、戦争に駆り出されたり、シベリア送りになったりした人間があふれていた。彼らから聞いたエピソードを踏まえて、これらの作品を執筆したのだと彼女は語っている。



囚人たちは収容所の過酷な毎日に耐えかねて逃亡を企てるが、ほとんど失敗して追手に銃殺される。一緒に脱獄した仲間がオオヤマネコに襲われて死に、再び収容所に連れ戻される男がいる（“La linko”）。1953年にスターリンが死んだというニュースを囚人たちが知って、この暴君の死に狂喜乱舞するという話もある（“Tiu tago”）。スターリンの死に伴う恩赦により釈放後、シベリアから仕事を求めて南ロシアのスタヴローポリまで流れ続ける元囚人の話もある（“La cigano kaj la perejo de la“Titanik””）。これらの作品では、1年のうち8～10か月も雪に閉ざされ、寒さと飢えと死に苛まれるシベリアの刑務所での過酷な生活が描かれているが、その雰囲気は必ずしも暗鬱ではなく、むしろときに明るささえ感じられる。

ミルトという囚人のファンタジックな逃亡譚（“Mirt”）はとりわけ印象に残った。看守が囚人たちと一緒に焚火にあたりながら、ミルトの思い出を問わず語り話し出す（このあたりは、チエホフの短編小説でも読んでいるような趣がある）。彼はフィンランド人でスキーの名手であったが、追手の見ている前で、シベリアの山々を軽々と飛翔しつつ逃亡してゆく。彼の行く手には死が待っているかもしれないが、それでも一瞬の自由、より尊厳のある生を求めて逃亡するのである。“La persekuto”にも自由を希求する囚人の姿が描かれている（“La cigano …”は2冊目に、“La persekuto”は1冊目に収録。それ以外の3編は両方に収録されている。）

収録された作品は必ずしも完成度の高いものばかりではない。どう見ても習作としか言えない作品もある。厳しい現実を描きながら、リアリティに欠けるという批判もあり得よう。また、あまりにも感情表現が直截すぎて興ざめする作品もある。とはいえ、大部分の作品は心にしみる佳作である。2冊の本に未収録の作品もあるとはいえ、もう彼女の新作を読むことはできない。もし存命であれば、いっそう成熟した作品世界を創り上げることもできただろうにと思うと、早世が惜しまれる。

（La Movado 2016年3月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた。）